

第10回目を迎えた「友の会ウィーク」

おはなし、紙芝居、絵本の読み聞かせなど活動成果を披露

昨年を上回る来場者がイベントに集い、楽しむ



中央図書館の開館を祝ってスタートした「葛飾図書館友の会ウィーク」も今年で10回目を迎えました。

「図書館からひろがる！ひろげる！」をテーマに、中央図書館の協力を得たこのウィーク。今年は図書館で活動している10団体と友の会の各委員会や実行委員会の企画で、26のイベントが11月3日(土・祝)から同23日(金・祝)まで中央図書館で開催されました。参加団体は子どもを対象にしたおはなし会や紙芝居、わらべ歌、手遊び、絵本の読み聞かせ、マジックショーや大道芸、一般を対象にしたリコーダー演奏、朗読会や手話ダンス、語りなどを含め活動の成果を発表しました。

友の会はナイトシアターや音楽映画の上映、手袋人形作り講習会、読書会、そして実行委員会による映像文学館と特別講演会を週末や祝日を中心に開催しました。今回は昨年を上回る来場者があり、主催者と合わせ、のべ1000名以上の参加を数えました。また期間中は2箇所の展示コーナーを利用して「友の会」の活動紹介や各委員会の今年1年間のイベントのポスターやプログラムなどを中心に資料を展示しました。

あおぞら、リコーダー友の会、かつしかシニア絵本の会、“泉”朗読の会、10(テン)の会、おはなしたまごの会、ふたばの会、紙芝居サークル飛行船、花だいこん、ザ・ハッピーの方々に参加いただきました。

友の会ウィーク

第6回 映像文学館(11月10日) 『評伝 永井荷風一個我の自由を求めて』

孤高の文学者の実像に迫る朗読と映画

図書館所蔵の資料の中からDVDによる映画と、カセットテープによる朗読を組み合わせ、「孤高の文学者」永井荷風の実像に迫ったイベント。永井荷風という作家は映画表題に《個我の自由を求めて》とあるように、時代の流れの底にある庶民の感覚や生活および知識人、政治家の信念や行動を戦争・貧困というパノラマから掬い上げ、明治・大正・昭和の時代を『断腸亭日乗』という日記をはじめ、多くの文学作品に収めた巨人。

今回の映像文学館ではその実像を、まず世界が認める評論家にして詩人、作家である加藤周一氏が語る【永井荷風像】のテープを再生、その後映画や演劇界で著名な佐藤慶の朗読、香川京子のナレーションで若き荷風の欧米留学から生涯、〈個の自由〉を求めて歩んだ戦前・戦後の姿が実像で紹介されました。

来場者は男女ほぼ半々の51名。年齢層は70代を中心に、90代の方も参加されました。アンケートの結果を見ると「面白かった」という感想が7割を超え、「加藤周一の話で荷風の人となりがあった」「大変すばらしい内容で感謝」「荷風をよく理解できた」「次回を楽しみにしている」など、これからの友の会の活動を期待する来場者の皆さんの激励が聞こえた楽しいイベントでした。

【第10回友の会ウィーク】参加イベント
『第6回 映像文学館』

日時…11月10日(土) 午後2時～4時
会場…中央図書館会議室1 入場無料(先着100名)
主催…葛飾図書館友の会

評伝 永井荷風
一個我の自由を求めて

第1部 加藤周一が語る永井荷風 カセットテープ
第2部 評伝・永井荷風 DVD上映

●監督 藤原達夫
●朗読 佐藤慶
●ナレーション 香川京子
※全席予約 観覧券あり

原典の研究から映像化作品まで多彩に

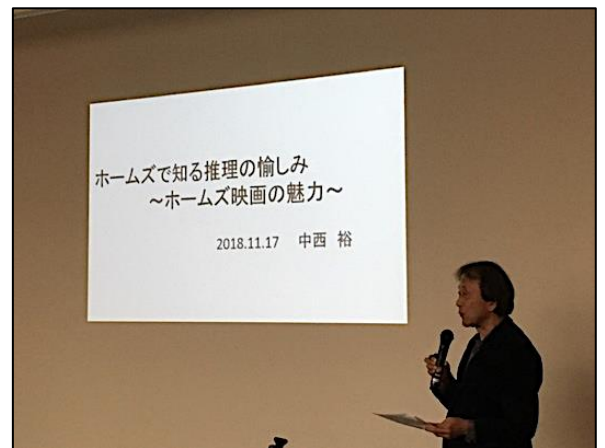
講師 中西裕(なかにし・ゆたか)さん

誰しも名前くらいは知っている、児童書版を読んで育った方も多い(はずの)シャーロック・ホームズは名探偵の代名詞とも言えるキャラクターですが、“シャーロキアン”または“ホームズファン”と呼ぶホームズ愛好家の興味の対象は、事件の推理にとどまらず膨大な範囲に及ぶ様子。この講演会ではJSHC(日本シャーロック・ホームズ・クラブ)創設以来の会員で、文献の調査にも詳しい中西裕さんに多彩なホームズ研究の一部を紹介していただきました。

前半はご自身の「シャーロック・ホームズ」との出会いから。初めて手にされたのは小学生時代で久米元一訳の講談社版だったとか。長沼弘毅の著書でホームズ研究(シャーロキアーナ)の存在を初認識、1977年にはJSHCに入会、などのホームズ歴をたどってから、まず海外における最近の研究の紹介を。本に証拠品の実物(?)を添付など手の込んだものが多いようですが、続いて披露された近頃の研究テーマも意表をついて、かなりなハイレベル。ホームズ物語に名前があがるメンデルスゾーンやワグナー他の作曲家たちが共通して、マルチン・ルター作曲の「神はわがやぐら」を取り入れた作品を書いていると、映像と音声での証明付きでした。

後半は見て楽しい歴代シャーロック・ホームズ映画やテレビ・ドラマ化のオンパレード。1900年に始まる映像化ホームズの歴史はバリモアなどサイレント時代からトーキー、カラー時代へ。ホームズ役者として名高いラスボーン等を経て、テレビシリーズでの人気者ブレットやカンバーバッチまで、珍しいソ連製やトンデモのパロディ作品なども交え動画に解説・比較分析付きでたっぷり。2時間も短く思える濃さでした。

当日は参加人数が75名にも及ぶ大盛況で、講師への質問者の中にはホームズのトレードマークである鹿撃帽(ディアスターカー)を着用した参加者もあり、聴衆側のホームズ度も熱く伝わる講演会でした。



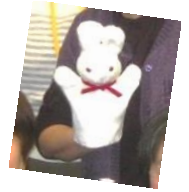
〈楽聖〉最愛の女性をめぐるミステリー

11月23日(金)友の会ウィークの最終日にナイトシアター委員会およびCD・DVDコンサート委員会の共催で、「不滅の恋／ベートーヴェン」(1994年 イギリス・アメリカ合作 バーナード・ローズ監督 121分)が上映されました。

〈不滅の恋人〉に楽譜とすべての財産を贈るというベートーヴェンの遺言に従い、名前も所在も不明な女性を探して歩くベートーヴェンの秘書であったシンドラーが最後に出会った真相とは…。ベートーヴェンが確かに残した「不滅の恋人」の記述をもとに作

られた本作品は、伝記映画と呼ぶよりミステリー仕立てのストーリーが際立ってはいるものの、全編にちりばめられた音楽—ピアノ・ソナタや交響曲、弦楽四重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ等々はこの映画のためにゲオルク・ショルティやギドン・クレーメルほか一流の演奏家により録音されたものが美しく、主演のゲイリー・オールドマン、シンドラー役のジェローン・クラブ、伯爵夫人役イザベラ・ロッセリーニたちの渋い演技を引き立てていました。有名な第9初演や甥との葛藤などエピソードも豊富。物語の謎と演奏が相まって、アンケートで寄せられた感想も好感度の高いものでした。





今年は首に赤いリボンをしたおしゃれうさぎ

今回で5回目になる手袋人形作り。昨年はカエルでしたが、今年は“うさぎ”。おはなし会などで使用する人形の作成とその使い方の実演方法の講習会を兼ねた、友の会（児童サービス応援委員会 おはなしくらぶ）と中央図書館共催によるイベントが11月14日（水）午前中に開催されました。図書館職員3名の指導のもと、参加者たちは白いボア布のカットから作業開始。丸めた綿を詰め、両耳を形よく縫います。次に目の位置を決め、赤いボタンに糸を通して両目をつけるという大事な作業。ちょっと位置を変えるだけで表情に影響します。前の人々が後ろを向き「これじゃ大福みたい」とか「寄り目」「離れ目」と笑いながら位置を決定した後、赤い糸でX印に口の刺繍。これで顔は整形ならぬ形成終了。尻尾をつけると“バニーちゃん”がほぼ完成。おしゃれに首に赤いリボン結び、25匹のウサギのミトンが誕生しました。参加者は片手を動かしながらうさぎとの対面にご満悦。昨年の反省を踏まえ、今回は片手の1匹だけでしたが、約1時間半で全員が完成できました。

最後は職員の皆さんの指導で2曲使ったの演じ方の練習です。親指と小指をうさぎの両手に入れての動作。大げさな動きは不要で、うさぎに子どもたちを集中させるような使い方がコツとのことです。既に児童サービス応援委員会のおはなしくらぶはこのうさぎのミトンたちをおはなし会でデビューさせて子ども達と楽しんでいます。



第7回『新春かるた会』 あらたに「町歩きかるた」も 百人一首のちらし取りは今年も女子中学生が上位入賞

今年も1月3日（木）午後、中央図書館で「新春かるた会」が図書館と共催で開かれました。

今回で7回目をむかえた「かるた会」は、朝野友の会会長の開会宣言ののち、5つのテーブルに分かれ、まず、昨年区民によって作成された、『木根川・渋江・四つ木 町歩きかるた』から開始。初めて見るかるたに少々とまどった様子でしたが、絵札が大きいのが印象的でした。次に『かつしか郷土かるた』と続けました。図書館職員の方が読み手になったこの2つのかるた、テーブルの上に手が伸びました。

そして小さな子も参加出来る「坊主めぐり」に進みました。今回はおもて面に上の句と絵、裏面に下の句と歌人名が印刷された小さな袋入りあられと、目の不自由な方もできる「お坊さんめぐり」も使用し、バラエティに富んだ遊びになりました。各競技でテーブルの1位と2位は今年も図書館から提供された雑誌などの付録を優先的にゲットできます。皆さん、悩みながら選んでいきました。

後半は『小倉百人一首』の“ちらし取り”から開始。パソコンが読み上げる句に耳を済ませ、目を走らせます。取り終わると、各テーブルに一人ずつ立った友の会会員や図書館職員が手を挙げ次の句が読み上げられていきます。上の句が読まれた瞬間に手が交差するテーブルと、下の句でやっと探し回るグループと、明らかに



差がでました。そして各テーブルの1位と2位がそれぞれ分かれ決勝戦に突入。次から次へと読み上げられ、競技は白熱。1位テーブルは大接戦になり、残り少なくなった札を取り合いました。僅差で競技が終了。

その結果、図書券2千円の賞品が優勝者の高砂からの中1に、図書券1千円が2位の鎌倉から来た中3、3位と4位はそ立石からの大人の参加者と東金町の中2に図書館バッグが贈られ、今年も全て女性でした。

こうして全員が景品を手し、大人16名、子ども16名が参加した「かるた会」は「また来年お逢いしましょう」との閉会の言葉で午後4時に終了しました。

新設の多読委員会「英語多読講座 第1回」 英語を学ぶきっかけを提供

大量の絵本を手に取り、楽しく交流



1月12日(土)の午前10時から正午まで、会議室2において第1回「葛飾多読 LOVE 英語多読講座～多読とは? やさしい絵本を仲間と一緒に読もう～」が開催されました。当日は21名の参加があり、1歳から80代の方まで幅広い年齢層の方々がテーブルごとにグループになり、絵本を楽しみながら交流することが出来ました。まず「NPO多言語多読」の酒井氏の話があり、石原委員長の挨拶で講座がスタートしました。

主に使用した絵本は Oxford Reading Tree というシリーズでしたが、それ以外の本も含め4ケース分、500冊以上の絵本を会場に持ち込みました。参加者の方々にもテーブルごとに自己紹介をして頂き、多読に関する説明と読み聞かせをしました。その後はそれぞれのペースで読みながらも、絵本のおもしろい「仕掛け」を見つけては周囲の人たちと共有したり、読んでいて疑問に感じたことなどを質問したりする方が多くいました。

参加者の方は60代の方が一番多く、次いで50代、70代の方も複数参加されました。アンケート結果から読み取れる参加者の感想としては、「楽しくて、びっくりの内容でした」、「ぜひ、このやり方で楽しみながらやりたい」、「絵本を楽しく読めました。次回が楽しみです」など、好意的な感想を多数いただきました。一方で、「少し押し付けがましいところを減らして欲しい」という意見もあったので、多読委員会としては『自由に読む』という点を大切にしたいと考えます。講座への要望や期待されることの欄では、「是非、今後も続けて下さい」、「一度にこれほど多くの絵本を手にして、絵を楽しみつつ勉強できる機会は初めてです。ありがとうございました」など、次回以降に繋がる温かい応援の言葉がありました。

(多読委員会副委員長 力石歩)

☆☆☆☆☆「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか! ☆☆☆☆☆

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか? 原則として第3土曜日の午後1時から3時まで中央図書館内で、また友の会の開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を右記の口座に納入してください。

ゆうちょ銀行 口座番号 00100-7-392065
口座名称 葛飾図書館友の会

図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、30年度年会費とご記入下さい。また1口500円の寄付も大歓迎です。払込手数料は窓口では130円、ATMからでは80円です。なお4月1日からそれぞれ200円、150円となります。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

入会届はHP (<http://katsutomo.jimdo.com/>) からダウンロードできます。

お問合わせ先: 中央図書館友の会担当者 (打越さん、吉村さん、白井さん、川井さん) Tel 03-3607-9201

静かだ。話し声も聞こえてこない。不気味な沈黙が続く。突然耳に入る音は次の駅を知らせるアナウンスの声。座れた左右を見渡せば客のほとんどが手元を見つめたり、指を動かしている。向かい側もほぼスマホとのニラメッコ。勿論、立っている人も▼異様な光景だと思ふ。そのほかは眠っているか、本を読んでいる人。圧倒的な少数である。一昔前にドイツへ行った時、車内の騒々しさが印象に残っている。ドイツは車内での携帯の使用は自由らしくそこら中から大声が聞こえてきた。来日した外国人は日本の電車内の静けさに驚き、感嘆するらしい▼車内での読書は過去の風景になった感がある。通勤時間に本のページを繰っていたのが懐かしい。面白くて先を読むのが惜しいという経験もあった。そういえばこの1年間、買った本は歴史物の新書とCD選びの参考にと「名盤名曲のベスト・ディスク」なる2冊だけ。紙から画面へのスピードは予想を超えている。年をとると、スクロールがスムーズにいかないと、指をなめないページがめくれない▼今まではピアノ独奏者の隣に黒子のように座っていた「譜めぐり」とさんも失職(?)するだろうし、自動譜めぐり機を超え、ピアノストは前にある画面をみながら、足でページめくりという電子ペーパーも発売されたそうだ。指揮者も絶対に▼あんまり見たくない味気のない風景が文字通り目の前だ。アナログ人間が生き続けていくのに難儀する世の中になったもんだ。

(中里広報委員)

色えんぴつ